

私たちと聖書

We and the Bible

第2集



私たちと聖書（第二集）

著者 峰本義明

はじめに

聖書はおよそ千九百年前に完成して以来、様々な言語に翻訳されて世界中で読み継がれています。多くの人々が聖書に影響されました。その結果、私たちの身近なものに聖書の影響があります。

本書では、私たちの身近な様々なものに潜む聖書の影響についてご紹介します。そして、聖書が私たちに与えて大切なメッセージを伝えていることをお知らせします。

なお、本書は伝道出版社で毎月発行している「みちしるべ」誌において、二〇一四年九月から二〇一七年二月までの間に連載されたものを電子書籍用として一冊にまとめたものです。そのため、各テーマが一話完結の形式となっております。

ページ順に読むのも良いですが、興味のあるテーマを選んで読むこともできるよう、今回はこの形式をそのまま残して構成しました。この本が読まれた方にとって、少しでも聖書を理解する助けとなることを切に願っております。

二〇二〇年 五月

目次

砂上の楼閣	4
復讐するは我にあり	6
目には目を、齒には齒を	8
在原業平の辞世歌	10
分子生物学	12
方丈記	14
古今和歌集の恋の歌	16
源氏物語	18
枕草子	20
西行の出家	22

砂上の楼閣

● 「砂上の楼閣」とは

慣用表現の中には、私たちに強い印象を残すものがあります。「砂上の楼閣」という言葉もその一つでしょう。「楼閣」とは重層の建築物のことです。砂の上に高層の建物が建てられていたら、いかにも危なっかしいと思わせられます。この「砂上の楼閣」とは「見かけはりっぱであるが、基礎がしっかりしていないために長く維持できない」こと、また「実現不可能」なことのたとえです。「彼が立てたプランは壮大で素晴らしかったが、砂上の楼閣に終わってしまった」などと使います。

この表現の語源は明確には分かりませんが、聖書のことばに由来するというのが有力のようです。イエス様は民衆に対してこう教えられました。

「わたしのこれらのことばを聞いてそれを行なわない者はみな、砂の上に自分の家を建てた愚かな人に比べることができません。雨が降って洪水が押し寄せ、風が吹いてその家に打ちつけると、倒れてしまいました。しかもそれはひどい倒れ方でした。」(マタイの福音書7章26、27節)

イエス様はこの直前に「岩の上に自分の家を建てた賢い人」(24節)についても教えておられます。岩の上に建てられた家は、洪水が押し寄せたり風が打ちつけたりしても倒れませんでした。それは「岩の上に建てられていたから」(25節)です。つまり、これは土台の問題なのだ、ということなのです。しっかりした土台に建て

られた家は、たとえどんな災害が降りかかろうとも大丈夫です。一方、「砂の上」という不安定な土台に建てられた家は、災害に遭うとひとたまりもなく「ひどい倒れ方」をするのです。

● 人生の土台

土台が大切なのは家を建てることだけではありません。私たちの人生もそうです。イエス様は「わたしのこゝとばを聞いてこれを行わない者」について、このたとえ話を語られました。あなたの人生の土台は何か、あなたは誰の言葉を聞いて日々を歩んでいるか、が問われているのです。

もし、「自己の実現こそが私の人生の幸いだ」と思っているなら、あなたはそれを良しとするこの世の言葉を聞いているのです。しかし、この世の言葉を聞く人生は「砂の上に建てられた家」です。どんなにあなたが実現できようとも、「死」という最大の嵐の前には無力です。あなたの努力が最後になんてしまつたら、そんな人生に何の意味があるでしょうか。

● 「主はわが巖」

「主はわが巖、わがとりで、わが救い主、身を避けるわが岩、わが神。わが盾、わが救いの角、わがやぐら。」（詩篇17篇2節）とダビデは歌いました。このときのダビデは身の危険にさらされていました。しかし、彼は主により頼みました。彼はイエス様のこゝとばを聞いて行う人の好例です。たとえ死が間近に迫っても、彼は恐れませんが。「岩」であるイエス様の上に人生を築いているからです。

あなたの人生は何の上に建てられていますか？ どうか、真剣にお考えになってください。

復讐するは我にあり

● 「リベンジします」

「リベンジ」という言葉を聞いたり使ったりしたことがあるでしょうか。日本では特にスポーツ界において使われます。ある野球選手が試合に負けたインタビューで「(次は)リベンジします」と答え、同じ相手と戦った次の試合では勝利しました。この場合の「リベンジ」は「借りを返す」という意味合いです。その程度なら害は少ないのですが、「リベンジ」は元々「復讐・報復・仕返し」という意味です。そう考えると、随分恐ろしい言葉を私たちは使っているのだなあと思います。

「復讐するは我にあり」という言葉があります。佐木隆三という作家の、直木賞を受けた小説のタイトルです。これは映画化もされ、テレビドラマとしても放送されました。この言葉は、表面だけを見ると、ひどい目に遭わされた自分がその仕返しをするという意味合いのように思われます。しかし、この言葉は聖書が元になっており、作家自身も聖書の言葉の意味合いを踏まえてタイトルにしたようです。

「愛する人たち。自分で復讐してはいけません。神の怒りに任せなさい。それは、こう書いてあるからです。『復讐はわたしのすることである。わたしが報いをする、と主は言われる。』」(ローマ人への手紙12章19節)

このみことばは、復讐するのは神様がなさることであるから、人は復讐をしてはいけない、と教えています。つまり、「復讐するは我にあり」の「我」とは、人ではなく神様なのです。

● 神様のなさること

神様は「復讐と報いとは、わたしのもの」(申命記32章35節)とおっしゃるにふさわしい御方です。神様だけが私たちに對する正しい判断・評価をなさることが出来るからです。

イエス様はある金持ちが死後にハデスで苦しんでいる様子を人々に語られました(ルカの福音書16章19〜31節)。当時、ユダヤ人の社会では、神様に祝福されているから地上でも裕福に暮らせるのだと考えられていました。ですから、イエス様からこの話を聞いたとき、人々は驚いたことでしょう。神様に喜ばれてははずの金持ちが、今はハデスで苦しんでいるのですから。そして、貧乏でさげすまれていたラザロという人が幸いなアブラハムのふところに居るということも驚きだったでしょう。

しかし、神様は正しい評価をなさったのです。金持ちは神様を真に愛してはいませんでした。反対に、ラザロはイエス様への信仰がありました。人の心をご覧になる神様は、正しく裁くことができます。あなたは、神様の前に恐れることなく立つことができますか？

● 人のなすべきこと

それでは人は何をなすべきなのでしょう。ある時、人々がイエス様に同じ趣旨のことを尋ねました。それに対してイエス様はこう答えられました。「あなたがたが、神が遣わした者を信じることに、それが神のわざです。」(ヨハネの福音書6章29節) 私たちができる最善のこと、それは「神が遣わした者」である主イエス様を救い主と信じることなのです。

目には目を、歯には歯を

● 「倍返しだ！」に喝采する人々

二年ほど前、「倍返し」という言葉が流行しました。あるテレビドラマの主人公の決め台詞です。その年の流行語大賞にもなりました。この主人公の台詞は正確には「やられたらやり返す。倍返しだ！」です。日ごろストレスにさらされ、本音をなかなか言うことができないサラリーマンにとって、主人公の正義感のある言動に共感を覚えた方も多かったでしょう。この「やられたらやり返す」と類似した表現として、「目には目を、歯には歯を」があります。「自分が害を受けたら、それと同じようにして復讐をすること」という意味だと一般には理解されています。これは古代のハンムラビ法典にも出て来る言葉ですが、聖書にも同様な表現があります。それはイスラエルにおける刑罰の規定の一節です。

「もし人がその隣人に傷を負わせるなら、その人は自分がしたと同じようにされなければならない。骨折には骨折。目には目。歯には歯。」（レビ記24章19〜20節）

これを読むと、いかにも「やられたらやり返す」の考え方だと感じますね。このようなことを定める神様は残忍な方なのでしょうか。

● 愛なる神様

この「目には目。歯には歯。」という規定は、実は復讐を奨励しているものではありません（ハンムラビ法典も同様です）。人間の復讐心には限界がありません。人は他人から何か痛い思いをさせられたら、その人を恨んで、自分がされたことよりもっとひどい仕返しをしたくなるものです。まさに「倍返し」です。この「目には目。歯には歯。」の規定は、そうした人間の際限のない復讐心に歯止めを掛けるものです。それは罪刑法定主義の表れであり、近代刑法の考え方につながるものです。つまり、この規定を定められた神様は決して残忍な方ではなく、愛のある御方なのです。同じ旧約聖書にはこのような規定もあります。

「子やぎをその母の乳で煮てはならない。」（出エジプト記34章26節）

私の意見として、これは神様の優しさを示していると思います。つまり、神に選ばれた民であるイスラエルはこのような残忍なことをしてはならない、という命令です。神様は子やぎに対しても愛の溢れた御方です。

● 慈しみ深きイエス様

イエス様はこのことについてどう言われたでしょうか。次の有名なみことばがあります。

『「目には目で、歯には歯で。」と言われたのを、あなたがたは聞いています。しかし、わたしはあなたがたに言います。悪い者に手向かつてはいけません。あなたの右の頬を打つような者には、左の頬も向けなさい。」（マタイの福音書5章38〜39節）

イエス様はご自分が語られたこの言葉の通り、ご自身の命を狙う者に対して何一つ拒みませんでした。むち打たれ、いばらの冠をかぶせられ、つばきをかけられ、最後に十字架にかけられました。それは滅ぶべき私たちがの身代わりとなるためでした。イエス様もあなたへの愛に溢れた御方なのです。

在原業平の辞世歌

●「つひに行く道…」

皆さんは在原業平（ありわらのなりひら）という歌人をご存知でしょうか。平安時代の初期に活躍した人で、「六歌仙」という六人の優れた歌人たちの一人に数えられています。また、「色好み」としても知られ、恋の教科書とも言える『伊勢物語』は業平を主人公として書かれています。歌人として名声を博し、また身分の高い女性と浮き名を流した業平は、平安貴族の理想像でした。そんな業平ですから、さぞかし愉快な人生を生きただろうと想像します。しかし、『伊勢物語』の最後には業平と目される主人公の辞世歌が記されています。

つひに行く 道とはかねて 聞きしかど 昨日今日とは 思はざりしを

「死の道は、人間誰しも最後には行く道だとかねてから聞いていたけれど、それが昨日今日のことだとは思ってもいなかったよ」という意味です。これは、自分の身に突然訪れた死に対する率直な驚きを詠んだものでしょう。業平の享年は五十六歳でした。平安時代では決して早くなかったとしても、死の時を迎えた彼は意外に感じることを禁じ得なかったのです。

●倉を建て替えてはみたものの…

業平と同じように考えたと思われる人のことを、イエス様も話しておられます。遺産分配の仲介を依頼して

きた人に対してイエス様が語られた金持ちのたとえ話です。(ルカの福音書12章16～20節)。

ある金持ちの畑が豊作になりました。彼は自分の持っている倉では作物を入れるのに十分ではないので、もっと大きな倉に建て替えて作物や財産をしまっておこうと考えました。そして、もう何年分も物をためることができたので、これからは安心して人生を楽しもうと喜びました。その時、神様は不意にこう言われたのです。

「愚か者。おまえのたましいは、今夜おまえから取り去られる。そうしたら、おまえが用意した物は、いったいだれのものになるのか。」(20節)

この金持ちも、そんなに唐突に死が自分に訪れるとは思いませんでした。彼は自分の人生に対する備えを万全にしました。しかし、彼は最も大事なことを忘れていました。命は生ける神様が支配しておられます。だから、人生にとつて一番大切なことは、この神様の御心にかなうように生きることです。それを忘れていた金持ちは、まさに「愚か者」でした。

●人生の解決

業平や金持ちのように、死は私たちの人生にも不意に訪れます。その時、私たちは彼らと同じ思いを持つしかないのでしょうか。イエス様は先のとえ話の後に、弟子たちにこう教えて下さいました。

「何はともあれ、あなたがたは、神の国を求めなさい。」(31節)

イエス様は私たちの歩むべき道を示して下さいます。いずれ訪れる死に対する真の準備は、イエス様を救い主と信じて滅びから救われることです。イエス様はその救いの道を私たちのために用意してくださいました。

あなたの準備はいかがですか？

●分子生物学から見た人間

分子生物学という、生命現象を分子のレベルで理解しようとする学問があります。分子生物学と聖書とに直接の関わりはありませんが、分子生物学が教える人間の姿は、ある意味で聖書が教えるものと似ています。

「人の子の結末と獣の結末とは同じ結末だ。これも死ねば、あれも死ぬ。両方とも同じ息を持っている。人は何も獣にまさっていない。すべてはむなしだからだ。」(伝道者の書3章19節)

私はこのみことばを読んだとき、分子生物学が教える人間の姿に似ている、と思いました。分子生物学は「すべての生物は、外見が限りなく多様であっても、その内部は基本的に同じである」と教えます。すべての生物の基本単位は細胞です。その細胞の機能を調べてみると、どの生物であってもほぼ共通の分子からできているそうです。そこから考えると、すべての生物は「内部はみな同じ」だというのもうなずけます。

人間は「万物の霊長」として、すべての生命の頂点に君臨すると考えられています。しかし、分子生物学から見ても、伝道者の書のみことばから考えても、人間は他の生物とあまり変わらないのかもしれないかもしれません。

●聖書から見た人間

しかし、聖書はまた、人間は特別な存在なのだと教えます。「わたしの名で呼ばれるすべての者は、わたしの栄光のために、わたしがこれを創造し、これを形造り、これを造った。」(イザヤ書43章7節)とあるように、神様は人間をご自身の栄光のためにお造りになりました。このような生物は人間の他にありません。

また、人間は神様によって創造されたときから「特別扱い」でした。神様は「われわれに似るように、われわれのかたちに、人を造ろう。」(創世記1章26節)と仰せられて、人を造られました。人間だけが神様に似たものとされました。それはすなわち、人間だけが神様と交わることのできる存在だということです。

そして、神様は人間を心から愛しておられます。創世記を見ると、天地万物は六日間で創造されましたが、人間は、神様が造られたあらゆるものの最後に創造されました。つまり、神様は人間に必要なものをすべて備えた上で、人間を造られたのです。神様がいかに人間を尊く扱っておられるかが分かります。

●神様の御心

そのように特別なものとして造られた人間が、神様を認めずに自分勝手に歩んでいるのは、何と大きな罪でしょうか。私たちが今、生きているのも、神様がすべてを支えておられるからです。人間はそれをさも当然のように取り扱い、しかも神様に背を向けているのです。しかし、そのような人間に対して、イエス様は呼びかけておられます。「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。」(マタイの福音書11章28節)

神様の、イエス様のこの呼びかけに、どうか応える方とされますように。

方丈記

●「無常」なる世

日本の古典作品の中には私たちの住む世について考えさせる言葉がいくつかあります。鎌倉時代に活躍した鴨長明が書いた『方丈記』もその一つでしょう。特にその冒頭部分は古来大変有名です。

「行く川の流れは絶えずして、しかも本の水にあらず……」。鴨長明はこのように書き出して、人間の姿を川の流れに浮かぶ泡にたとえています。泡が、結んだかと思うとすぐに消えてしまうように、人間も生まれては消えていくものだと言っています。人間や世に対するこうした見方は「無常観」と呼ばれています。「常なるものは無し」という意味で、この世には永続するものはなく、全てが移り変わっていくものだとする考え方です。実は、聖書の中にも長明が書いたものと似た言葉があります。

「あなたがたには、あすのことはわからないのです。あなたがたのいのちは、いったいどのようなものですか。あなたがたは、しばらくの間現われて、それから消えてしまう霧にすぎません。」（ヤコブ書4章14節）

「泡」ではなく「霧」にたとえるところがイスラエルの風土を思わせます。ともあれ、どうやらこの世は永続するもののないところのようです。

●聖書の語る世

聖書は、私たちの住むこの世がどのようなものなのか、さらに教えてくれます。まず初めに、この世（世界）は神様によって創造されました。「初めに、神が天と地を創造した。」（創世記1章1節）と記されているように、真の神様が天地を創造し、生き物も人も創造されました。私たち人間は神様の被造物です。

しかし、この世には必ず終わりが来ます。「世と世の欲は滅び去ります。」（ヨハネの手紙第一・2章17節）とあるように、この世は決していつまでも続くものではなく、滅び去ると聖書は告げます。

しかも、その終わり方は激しいものです。「今の天と地は、同じみことばによって、火に焼かれるためにとつておかれ、不敬虔な者どものさばきと滅びとの日まで、保たれているのです。」（ペテロの手紙第二・3章7節）とあるように、私たちの住むこの世は、終わりの時に火で焼かれます。「火」が具体的に何を指しているのかは分かりません。しかし、神のみことばはそのように告げています。

●救いの光

永続するものがない世に生きる私たちに、しかし、希望を与えてくれるのが聖書です。

「神は、実に、そのひとりと子をお与えになつたほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。」（ヨハネの福音書3章16節）

神様から離れ、空しい世を生きる私たちですが、神様はその「世（私たち）」を愛してくださいました。しかもそれは、ご自身が愛される御子イエス・キリストを犠牲にするほどの愛です。

あなたは、いずれ滅びてしまう世と一緒になりますか？ それとも、神様の愛を受け入れてイエス様と共に生きますか？ 新しい年の初めに、よく考えられますように。

古今和歌集の恋の歌

●古今和歌集の恋の歌

『古今和歌集』は平安時代に天皇の命によって編纂された最初の勅撰和歌集です。これには二二一首の和歌が二十巻に分けて収められています。巻にはそれぞれテーマが設けられているのですが、その中で二つのテーマについては多くの巻数が与えられています。それは「四季」と「恋」です。

「四季」については最初の六巻で歌われます。一・二巻が春、三巻が夏、四・五巻が秋、六巻が冬と、四季の順番になっています。そして、一つの巻の中も四季の移り変わりを反映した順番で歌が並んでいます。例えば、第一巻は立春の歌から始まり、春の進行と対応した歌が続きます。そして第二巻は行く春を惜しむ歌で終わります。夏・秋・冬も同様です。

「恋」の歌は第十一〜十五巻の五巻にわたって収められています。そして、この恋の巻の歌も四季と同様の配列がなされています。つまり、第十一巻は恋の予感の歌から始まります。そして恋が生まれ、二人が会い、恋が成就します。しかし、やがて恋は倦怠期を迎え、相手の心が離れがちになり、ついに第十五巻の終わりで恋に終わりが訪れます。平安時代の歌人たちにとって恋とは、四季の移り変わりと同じようにいずれは移り変わるものであるようです。

●人の望むもの

「恋」と「愛」とは少々違いがあるかもしれませんが、古来より人は「変わらぬ愛」を求めて来ました。聖書は、私たちの持つ真実な思いを的確に指摘します。

「人の望むものは、人の変わらぬ愛である。」（箴言19章22節）

しかし、これがいかに実現することが難しいかも、私たちはよく知っています。昨今では揺るがないものと思われていた、親の子に対する愛ですら疑わしくなってきました。様々な事情はあるとはいえ、親が幼い我が子を殺すという事件のニュースは私たちの心胆を寒からしめるものです。人の世の中では、恋も愛も移りゆくもの、変わり果てるものなのでしょう。

● 「神は愛です。」

私たちの救いは、やはり聖書にあります。そもそも、神様ご自身が愛なる御方です。「神は愛です。」（ヨハネの手紙第一・4章16節）と示されているとおりです。神様はどのようにして私たちを愛してくださるのでしょうか。「女が自分の乳飲み子を忘れようか。自分の胎の子をあわれまないだろうか。たとい、女たちが忘れても、このわたしはあなたを忘れない。」（イザヤ書49章15節）

仮に親の愛が信用できない世であっても、神様の愛は変わりません。そして、私たちを救うために、神様はご自分のひとり子を犠牲にしてくださいました。

「私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪のために、なだめの供え物としての御子を遣わされました。ここに愛があるのです。」（ヨハネの手紙第一・4章10節）

あなたもこの神の愛を受け取りませんか。

源氏物語

●『源氏物語』の主人公は誰か

紫式部の書いた『源氏物語』は日本古典文学の最高峰です。この『源氏物語』の主人公は誰か、という議論があります。確かに光源氏の恋の遍歴を中心に描かれています。しかし、光源氏の人物造形はやや平板であり、むしろ彼に関わる女性たちの方が心理描写も細かく複雑です。このことから、真の主人公は女性たちだという考えもあります。

例えば最終巻、「夢浮橋」巻では浮舟という女性が登場します。彼女は源氏の子孫である薫と匂宮の二人の貴公子から愛され、その狭間で苦しんで、ついに入水自殺を図ります。しかし、死ぬことはできず、横川の僧都に助けられ、その後に出家します。浮舟が生きているという噂を聞いた薫は僧都を訪ね、この女性が浮舟か確認しようとしています。浮舟は二度と愛憎の中に身を投ずまいと決心し、「人違いであつたら困る」として薫からの手紙を受け取りません。浮舟は、平安時代という男性社会の中で自分の生き方を貫いた女性だと言えるのです。

●聖書の女性たち

聖書にも信仰を貫いた多くの女性がいますが、旧約聖書に出てくる異邦人ルツもその一人で、彼女は飢饉が起こったイスラエルから逃れてきた夫婦の長男と結婚しましたが、義父も夫も亡くなります。彼女は、姑のナオ

ミがイスラエルに戻る際に自分の家に帰るよう諭されますが、ルツはナオミと一緒にいくと固く決意しました。

「あなたの行かれる所へ私も行き、あなたの住まれる所に私も住みます。あなたの民は私の民、あなたの神は私の神です。」(ルツ記1章16節)

古代において夫を亡くした女性はいかに生きにくかったでしょう。まして、生まれ故郷を捨てて見も知らぬ土地へ行くのです。しかし、ルツは真の神様を「私の神」と認め、頼っていくことを選択したのです。

「あなたがその翼の下に避け所を求めて来たイスラエルの神、主から、豊かな報いがあるように。」(同2章12節)
後に夫となるボアズからこう声をかけられたルツは、まさに神様の導きのうちにボアズと出会い、彼と結婚して子どもを産みます。その子はダビデ王の祖父となりました。ルツは神様に頼る人生を自らの意志で選び、祝福されました。

●ベタニヤのマリヤ

イエス様がベタニヤという町に来られた時、マルタとマリヤという姉妹の家に行かれました。マルタはもてなそうと忙しく働きましたが、マリヤはイエス様の足下に座ってみことばに聞き入りました。そのマリヤを非難したマルタに対して、イエス様は優しく諭されました。

「どつしても必要なことはわずかです。いや、一つだけです。マリヤはその良いほうを選んだのです。彼女からそれを取り上げてはいけません。」(ルカの福音書10章42節)

あなたはいかがですか。神様に頼る人生、イエス様のみことばに聞き入る人生を選びませんか。それは祝福に満ち、永遠の栄光へと続く道です。

枕草子

●清少納言と中宮定子

「春はあけぼの。……」で始まる『枕草子』は平安時代に清少納言によって書かれた随筆です。清少納言の鮮やかな感性が光るこの作品は、同時に清少納言とその主人である中宮定子との深い交流も描いています。

一条天皇の後である中宮定子に初めて仕えた時、さすがの清少納言も慣れない宮仕えに戸惑い、緊張していました。そんな清少納言に対して、まだ17歳だった定子は彼女を呼び寄せ、絵を見せてくれました。冬の寒い頃だったので、袖から見えた定子の小さな手が赤くなっていたのを、清少納言は印象深く記しています。

その後、定子は父の死や兄弟たちの左遷などの辛い目に遭います。一条天皇から深く愛されてはいたのですが、権力の駆け引きの渦中に巻き込まれた定子は、疲れ果てたように24歳で亡くなります。清少納言は、そんな中宮定子の後宮がいかに知的で華やかであったかを書き残しました。それが『枕草子』です。清少納言は中宮定子の愛に応え、彼女の名誉と優しさを後世に伝えようとしたのです。

●ダビデとヨナタン

イスラエルの王となったダビデは、その前にサウルという王に仕えていました。しかし、若くて有能なダビデをねたんだサウルは、たびたび彼を殺そうとしました。サウルの息子であるヨナタンはダビデを愛し、父の

手から彼を守ろうとしました。

ある時、サウルから殺されそうになったダビデは、王の下から逃げ出しました。ヨナタンはダビデと会い、自分が父の心を見極めてダビデに伝えることを約束しました。ヨナタンは父サウルの前に出て、父が本心からダビデを殺そうとしていることを確認しました。いわば自分の父の敵となったダビデに対して、ヨナタンは父の本心を知らせ、立ち去るように勧めました。「ヨナタンは自分を愛するほどに、ダビデを愛していた」（サムエル記第二・20章17節）のです。

後に、ヨナタンは父サウルとともに戦争に出陣し、敗れて戦死します。ヨナタンの死を知ったダビデは、「あなたの私への愛は、女の愛にもまさって、すばらしかった」（サムエル記第二・1章26節）と嘆きました。ダビデもヨナタンの愛に応え、彼の名誉を称えました。

●あなたの「主」

あなたの「主」はどなたでしょうか。そしてその方は、「自分を愛するほどに」あなたを愛してくださいませか。あなたを愛してやまない方、その方こそ主イエス・キリストです。

同時に、この方は「主」です。あなたはイエス様に愛されました。あなたはその愛に対してどんな態度を取りますか。無視しますか。それとも清少納言やダビデのように、愛に応えようとしていますか。イエス様の愛に応えようとする時、イエス様はあなたの「主」となり、あなたはイエス様に仕えていくのです。

「わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽い」（マタイの福音書11章30節）と言われたイエス様は、あなたとともに歩むことをお望みです。あなたはいかがなさいませか。

●西行の出家

平安時代の末期、西行という有名な歌人がいました。小倉百人一首や新古今和歌集という権威のある歌集にも彼の和歌が選ばれています。『奥の細道』を書いた松尾芭蕉は、西行を師と仰いでいました。

その西行は、俗名を佐藤義清（のりきよ）といいます。彼は宮中の警護を担当する北面の武士の一人でしたが、23歳の若さで世を捨てて仏道修行の道に入りました。これを「出家」といいます。西行にはこの時、四歳になる女の子がいたのですが、彼が出家の決意をして家に戻ると、この女の子が父親を慕って裾にまとわりついてきました。その時、西行はその子を縁側から蹴落として家を出て行つたと伝えられています。この世への未練を断ち切ろうとしたのですが、それにしても並々ならぬ決意だつたらうと思わせます。

●イエス様の求めること

福音書をひもとくと、イエス様についていきたいと言つた人々が出てきます。その人々に対して、イエス様は一人一人に応じた言葉をかけておられます。

イエス様が道を進んでおられたとき、ある人が出てきて、イエス様についていくと言いました。その人にイエス様は「狐には穴があり、空の鳥には巢があるが、人の子には枕するところありません。」（ルカの福音書

9章58節)と言われました。このことは、イエス様について行くには中途半端な気持ちであってはならないことを教えます。

一方、イエス様に従う前に家の者にいとまごいを言いたいと言った人に対し、イエス様は「だれでも、手を鋤につけてから、うしろを見る者は、神の国にふさわしくありません。」(同62節)と言われました。このことから、イエス様に従う決意をしたならば、この世のことに未練を残してはならないことを教えます。

イエス様は、私たちがご自分を救い主だと信じ受け入れることを願っておられます。そして、信じた人はご自身についてくるよう求めておられます。信じて救われたら終わり、というわけではありません。信じた人は、イエス様に従うことが必要なのです。

●軽い荷物

あなたはイエス様に従うことをためますか。イエス様は「わたしは心優しく、へりくだっているから、あなたがたもわたしのくびきを負って、わたしから学びなさい。そうすればたましいに安らぎが来ます。」(マタイの福音書11章29節)と言われました。何故でしょうか。「わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽いからです。」(30節)と続きます。あなたが従うように求められている方は、あなたの命を救うためにご自身を捨ててくださった御方です。その方なら、私たちは喜んで信頼して、従うことができます。

「主よ。私たちがだれのところに行きましょう。あなたは、永遠のいのちのことばを持っておられます。」(ヨハネの福音書6章68節)とペテロは言いました。イエス様の愛の深さに比べたら、私たちの負う荷は軽いものです。ぜひ、決意してイエス様に従われますように。



聖書はあなたに知恵を与えて、
キリスト・イエスに対する
信仰による救いを受けさせることができます。
—テモテ第二の手紙3章15節—

私たちと聖書（第2集）

2020年5月1日

著 者：峰本義明

編 集：みちしるべ編集室
